



Title	巻頭言：第15号の発刊に寄せて
Author(s)	
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2019, 15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76172
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

巻頭言 第15号の発刊に寄せて

『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』第15号をお届けします。2018年度は、MHBが研究会から学会へと移行した記念の年です。2018年度のMHB研究大会では、学会創設後初めての総会を行い、学会としてのスタートを切りました。本号では、その学会創設記念シンポジウム記録として「母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究のこれまで（2014-2018）とこれから」を掲載いたしました。2013年度の研究大会にMHB研究会としての10周年記念大会を行い、その際にMHB研究会の10年の歩みを振り返りましたが、今回は学会としての発足にあたり、その後の5年間および今後の課題を見据える章といたしました。なお、この章の最後には指定討論者としてペンシルバニア大学のバトラー後藤裕子先生に、鳥瞰図をもってMHBが今後果たしていくべき役割や再定義すべき概念を指摘していただきました。ぜひご一読ください。

2018年度はもう一つの意味で記念すべき大会でした。それは、MHB発足以来MHBがカバーする5つの領域の一つと定義しながらも、今まで大会テーマとして取り上げることができなかった、ろう者のバイリンガル教育に焦点をあて、「新時代のマルチリンガル教育を考える—バイモーダルろう教育からの示唆—」というテーマを掲げて開催できたことです。このテーマに関して、香港大学のGladys Tang博士に、先進的な取り組みをされている香港での実践も含めて基調講演をしていただきました。この貴重なご講演内容を今回MHBにご寄稿いただくことができました。この論文からは、今後のろう者のバイリンガル教育への示唆にとどまらず、バイリンガル教育全般を考えるためのヒントを得ていただければと願います。

一般投稿論文として、本号には、研究論文2本を採択いたしました。研究論文では、まず、佐野愛子氏・田中瑞穂氏の共著論文、「バイリンガルろう教育における教育方法としてのトランス・ランゲージング—授業分析スキームBOLTの開発—」です。この論文は、様々なコミュニケーションモードが使用されるバイリンガルろう教育の授業を分析するために、BOLT（Bilingual Orientation in Language Teaching）を開発し、それを用いて教室内対話を分析したものです。分析の結果、教室内で学習者と教師がトランス・ランゲージングしながら学びを深めていく様子がよくとらえられており、類似の研究をあまり見ない貴重な論文

です。

もう1本は、宮崎幸江氏による「日本育ちのリマ帰国生の日本語会話力—JSL対話型アセスメント(DLA)を用いた分析—」を掲載しました。これは、言語形成期の一部または大半を日本の学校で教育を受けた後、ペルーへ帰国した学齢期の子ども8名が、どのように日本語を保持しているかを調査したもので、日本語を学んで自国へ帰国した児童・生徒の言語能力に関する貴重な研究となっています。

巻末には、例年通り、活動報告、SIG(部会)情報、紀要第16号への投稿規定の他、新たに学会会則などの情報も記載しております。MHB ウェブページ情報と合わせてご利用下さい。紀要15号の発刊に際し、ご投稿下さった方、査読、編集に多大な労力をささげて下さった方、その他関係者の皆様に感謝いたします。

母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)学会会長

湯川 笑子

2019年5月